

六条御息所の生霊、源氏と逢瀬を楽しんでいた夕顔をとり殺す（源氏物語・夕顔）

光源氏は、¹六条御息所²という教養ある婦人に忍んで通っていた。そのころ源氏は惟光の家の近くに夕顔のひっそり咲く家を見かけて、惟光に偵察させ、その女・夕顔（女君）と関係した。源氏は夕顔の素性を良く知らなかった。隣家の話し声まで聞こえる庶民の家から女を連れ出し、空家での逢瀬を楽しみ、その二日目の夕方になった。夕顔には召使いの女房右近がついており、源氏の家来は建物の離れたところにいる。

たとしへなく静かなる夕べの空を眺め給ひて、奥の方は暗うものむつかしと女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。夕映えを見交はして、女もかかあるありさまを思ひのほかにあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れて少しうちとけゆく気色、いとらうたし。²つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま、若う心苦し。格子とく下ろし給ひて大殿油参らせて「名残りなくなりたる御ありさまにて、なほ心のうちの隔て残し給へるなむつらき」と恨み給ふ。

「内裏に、³いかに求めさせ給ふらむを、いづこに尋ぬらむ」と思しやりて、かつは「あやしの心や。⁴六条わたりにも、いかに思ひ乱れ給ふらむ。恨みられむに、苦しう、ことわりなり」と、いとほしき筋は、まづ思ひきこえたまふ。何心もなきさしむかひを、あはれと思すまに「あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばや」と、思ひ比べられ給ひける。

宵過ぐるほど、すこし寝入り給へるに、御枕上にとをかしげなる女みて、「己がいとめでたしと見た

1 傍線は読解に役立つ重要単語。数字は読解のヒント
2 敬語が使われているのが源氏。女には使われていない。この女の状況と様子をまとめてみよ。
3 源氏が自分が仕事をサボり行方知れずなのを内裏の人が心配しているのではないかと案じている
4 六条御息所ともつきあっていた、その六条に恨まれている自覚があるようだ
5 この発言部分は古語がわかれば読み取れる。誰が何を言っているのか。

てまつるをば尋ね思ほきで、かくことなることなき人を率ておはして、⁵時めかし給ふこそ、いとめざましくつられ」とて、この御かたはらの人をおき起こさむとす、と見給ふ。

物に襲はるる心地して、おどろぎ給へれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きてうち置き給ひて、右近を起こし給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参り寄れり。「渡殿なる宿直人起こして『紙燭さして参れ』と言へ」とのたまへば、「いかでかまからむ。暗うて」と言へば、⁶あな、若々し」と、うち笑ひ給ひて、手をたたき給へば、山彦の答ふる声、いととまし。人え聞きつけで参らぬに、この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて我がの気色なり。

「物怖ぢをなむわりなくせさせ給ふ本性にて、いかに思さるるにか」と、右近も聞こゆ。「いと弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほし」と思して、「我、人を起こさむ。手たたけば山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開け給へれば、渡殿の火も消えにけり。

風すこしうち吹きたるに、人は少なくてさぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子、むつましく使ひ給ふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、「紙燭さして参れ。『隨身も、弦打して、絶えず声づくれ』と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。惟光朝臣の来たりつらむは」と、問はせ給へば、「さぶらひつれど、仰せ言もなし。暁に御迎へに参るべきよ

6 このやりとりは誰と誰の会話で、どういう内容・状況か。また「若々し」はこの文脈でどのような意味であろうか。
7 女君・夕顔の現在の状況はどのようであるか、また、右近は何を言っているのか。登場人物の認識は？
8 この文は疑問になっているがどういうことか。

し申してなむ、まかではべりぬる」と聞こゆ。この、かう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火あやふし」と言ふ言ふ、預りが曹司の方に去ぬなり。内裏を思しやりて「名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直奏し、今こそ」と、推し量り給ふは、まだいたう更けぬにこそは。

帰り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつぶし臥したり。¹⁰「こはなぞ。あな、もの狂ほしの物怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもの、人を脅やかさむとて、け恐ろしう思はずるならむ。まろあれば、さやうのものには脅されじ」とて、引き起こし給ふ。「いとうたて、乱り心地の悪しうはべれば、うつぶし臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ」と言へば、「そよ。などかうは」とて、かい探り給ふに、息もせず。引き動かし給へど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、「いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめり」と、せむかたなき心地し給ふ。

紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ」とのたまふ。例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬ、つつましさに、長押にもえ上らず。¹¹「なほ持て来や、所に従ひてこそ」とて、召し寄せて見給へば、ただこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。

¹²「昔の物語などにこそ、かかることは聞け」と、いとめづらかにむくつけけれど、まづ、「この人いかになりぬるぞ」と思ほす心騒ぎに、身の上も知られ給は

ず、添ひ臥して、「やや」と、おどろかし給へど、ただ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。言はむかたなし。頼もしく、いかにと言ひ触れ給ふべき人もなし。法師などをこそは、かかる方の頼もしきものには思すべけれど。さこそ強がり給へど、若き御心にて、いふかひなくなりぬるを見給ふに、やるかたなくて、つと抱きて、「あが君、生き出で給へ。いとみじき目な見せ給ひそ」とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひものうとくなりゆく。

⁹ 弓を鳴らすのは魔除けらしいが、火の用心というのは何の關係があるのか。とにかく大声を出せばいいのか、それとも笑うところなのか。

¹⁰ この源氏の発言の気持ちと意図は、源氏の考えは。

¹¹ 同じことを二回言っているが、紙燭を持って来た家来の行動はどのようなことか。平安常識から考えよ。

¹² ここで状況への認識が変わった。どう変わったか。